

モモ台木品種「ひだ国府紅しだれ」の種子発芽率向上のための貯蔵法

【要約】モモの台木品種「ひだ国府紅しだれ」の種子発芽率向上には、核を割って取り出した種子を湿潤状態で 30～35℃に 2～3 日間遭遇させる前処理を行った後に低温貯蔵する方法が有効である。

中山間農業研究所 試験研究部

【連絡先】 0577-73-2029

【背景・ねらい】

「ひだ国府紅しだれ」は、平成 20 年 3 月に品種登録されたモモの台木用品種で、近年発生が増加しているモモ若木の枯死障害を軽減できる台木として急速に普及が進んでいる。しかし、本品種の種子は休眠が深いため、慣行の低温貯蔵では発芽率が非常に低いことから、効率的な苗木生産に支障を来している。そこで、「ひだ国府紅しだれ」種子の休眠打破に有効な貯蔵方法を明らかにし発芽率の向上を図る。

【成果の内容・特徴】

- 1 4 月上旬に播種を行うため、2 月中旬頃に金づちや万力などを使って核を割り中から種子を取り出す（図 1）。
- 2 核から取り出した種子は、底の平らなタッパーやシャーレ等の容器に吸水紙（ろ紙やティッシュペーパー等）を敷いた所に並べて水で十分に湿らせる（図 2）。
- 3 種子を入れた容器は、湿潤状態を保持するためふたをして、恒温器等に入れて 30～35℃の温度に 2～3 日間遭遇させる前処理を行う。
- 4 前処理を行った種子は、容器のまま 2～5℃の冷蔵庫内で 40～50 日間低温貯蔵することで休眠が打破され高い発芽率が得られる（図 3）。

【成果の活用・留意点】

- 1 核のままでの前処理では、発芽率の向上効果は期待できない。
- 2 核を割る際に傷ついた種子は、貯蔵中に腐敗するため使用しない。
- 3 40℃以上の温度での前処理は、発芽率が低下するため行わない。
- 4 低温貯蔵後は、容器のまま種子を 15℃前後に数日間置いて芽が動き始めたことを確認してから播種する。

【具体的データ】

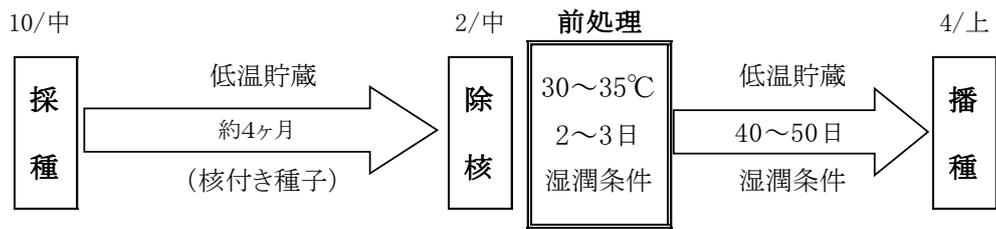


図1 発芽率向上のための採種から播種までの工程



図2 割った核（左）と湿潤条件下に置いた種子（右）

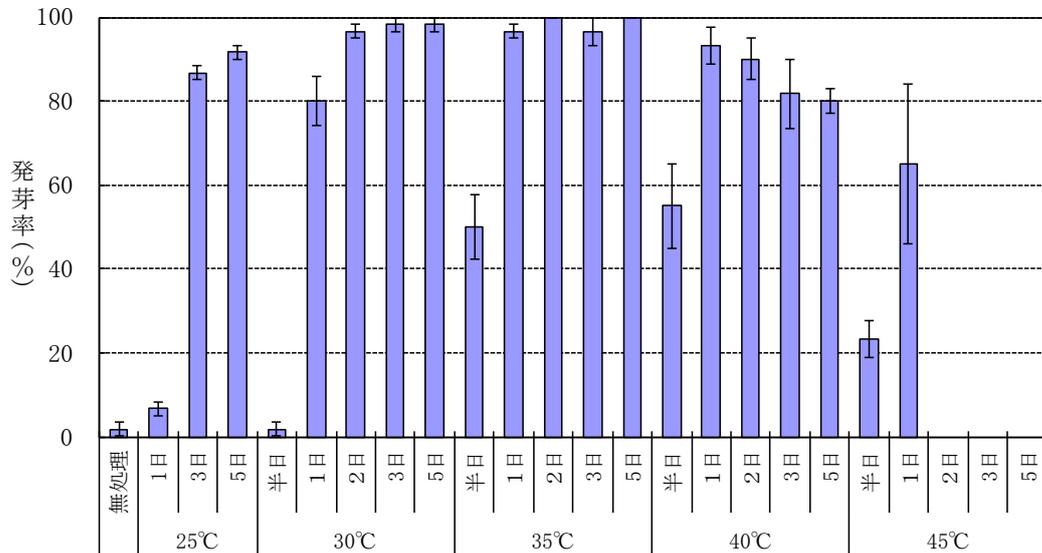


図3 前処理の温度及び日数が種子発芽率に及ぼす影響(平成24年)

注)2月16日に除核した種子(1区20粒の3反復)を湿潤条件下で各温度に所定日数遭遇
処理後はそのまま2°Cで低温貯蔵し4月5日に15°Cに移して20日後までの発芽率を調査

研究課題名：中山間地特産果樹モモ、リンゴ、クリ等の新品種育成と栽培技術の開発
(平成21~28年度)

研究担当者：宮本善秋